

【緑地を楽しむ本】

『ぎふちょう』

館野 鴻・作
偕成社



作者は、熊田千佳慕氏に師事した方で、表紙の絵から圧倒されます。写真では表せない世界だなあとページを繰るたびに見入ってしまいます。

ぎふちょうは早春にだけ現れ、カタクリなどの蜜を吸って卵を産み寿命を終える、早春のわずかな期間

にしか姿を見せない生きものたち「スプリング・エフェメラル(春のはかない命)」と呼ばれているそうです。そして、ぎふちょうがユニークなのは、1年ほどの寿命のうち10か月もの間、蛹で眠っていることです。眠っている蛹のまわりの林の生きものの様

子が繊細なタッチで描かれています。本文の後ろには、描かれている動植物の名前が記録されていて、林の中にちいさなキビタキの姿を見つけるような、探し絵の楽しみもあります。

あとがきに

「蛹のつもりで林にねころんで目を閉じると、交錯する無数の生きものたちが、ひとつの生きもののように感じました。私が感じている林全体が、ひとつの生きものだと。」

とあります。緑地を歩く時も、そんな感じがしますね。

～緑地にも蝶が舞う季節ですね～

(遠藤)